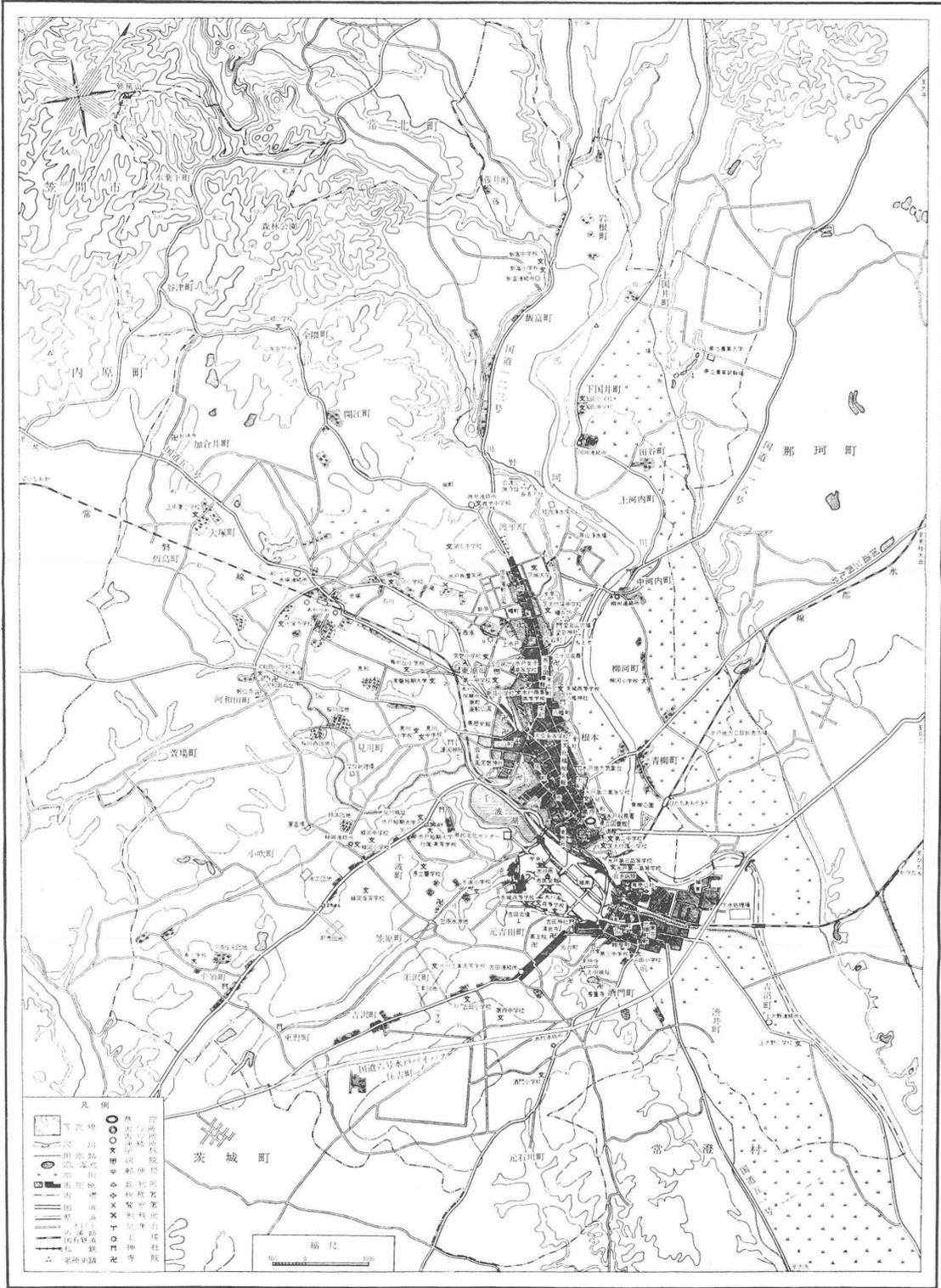


水戸市全図



総 説

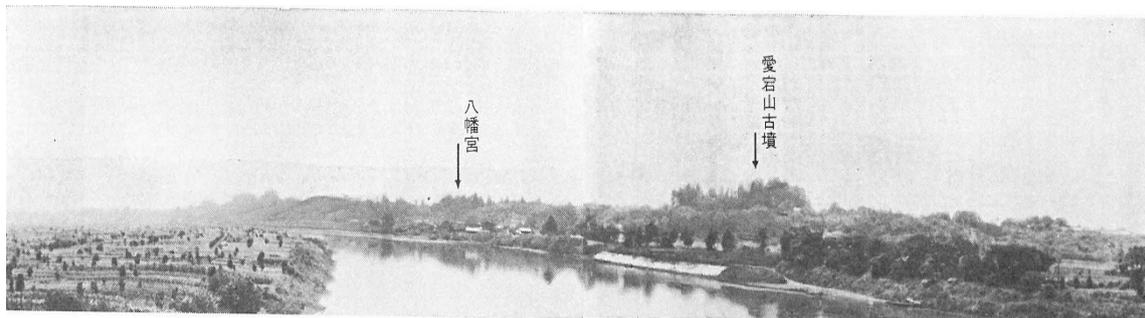
歴史と郷土

人間は歴史的存在である、といわれる。現在に生きるため、われわれは日常の用務にいそしんでいるが、現在の生活の基盤には、過ぎ去った世々の人生の経験と文化の蓄積とがある。そして現在の生活の営みには、常に将来への発展と進歩とが期待される。この関係を明らかに認識するとしないとにかかわらず、人間の生活それ自体がすでに歴史的な性質をもつものであるが、ひとたび現在の生活を起点として過去を回顧し、将来を展望するならば、歴史的存在の意義ははっきりと認識される。歴史意識とは、実にこのような認識作用を指しているのである。

歴史意識が一つの対象に向けられ、目標を定めて確かな体系を作ろうとするところに、修史の事業がはじめられ、その成果が歴史の書となる。歴史の書は歴史意識の産むところであるが、また歴史の書によって歴史意識が啓発される。ここに歴史の書を読むこと、すなわち読史の重要な意義がある。こうして、修史と読史とは歴史学の両面をなすのである。

修史も読史も、歴史意識の対象と目標によって、いろいろの種類に分かれる。すなわち一家一族の歴史の場合には、家史・家譜となる。江戸時代の諸大名はたいてい家史・家譜を編さんした。一つの地域・一つの地方の場合は、郷土史となる。これは歴史とともに地誌をもふくむ編さん書として、江戸時代から諸国に官選または私選の書が多く著わされた。現代では、県・市・町村などの自治体の企画による郷土史の編さん事業が流行し、他方では大企業の社史の編さんも盛んである。県

市町村史には、とくに郷土性が歴史意識の中心をなしている。そして元来、郷土史と縣市町村史とはかならずしも同一のものとは限らないにもかかわらず、現在では縣市町村史すなわち郷土史の趣を呈している。県史・市史と銘打っても、その内容が自治体の歴史ではなく、郷土の歴史であることはいうまでもない。その修史・読史にあたって、郷土の歴史意識が最も重んぜられなければならないこともまた、明らかである。歴史意識が郷土の範囲を越えて、国家の沿革・民族の盛衰にまで拡がるとき、国史・民族史の認識となること、これまた説明するまでもあるまい。



第1図 那珂川と水戸の台地

ここ水戸の台地、那珂川のほとりに立って歴史を考えるひと時があるとしよう。この大川は、支流の水を集めて水かさを増し、流れ来たり流れ去り、刻々に流れて休むときがない。過ぎゆきし世にもこのように流れ、来たらん世にもこのように尽きることなく流れて、太平洋にそそぎつづけるだろう。この流水のほとりには、古来幾多の栄枯盛衰がくり返された。遠く陸奥の蝦夷を征する軍馬の列が流れを乱して渡ったし、吉野朝廷の運命をになつて苦戦をつづける勤王軍が往来した。

仰ぎ見る台地には、応永の大掾氏の敗退、天正の江戸氏の滅亡があり、勝利のかけに敗亡の恨みが堆積している。いま見渡す川辺に自動車が走り、元城址の校庭には、未来の市民たちの歓声がひびく。昔の城郭に代わって、高層の建物の内では、市政が議され、県政が執り行なわれる。このように時勢の推移に思いを馳せれば、誰とでもそぞろに水戸の今昔をなつかしみ、現状を考え、また未来の発展を望む心が油然而と湧くことだろう。まことに、郷土意識と歴史意識とは、緊密に結び合っ
て住民の精神を形成しているのである。

人が生まれ育ち居住する土地を、他の土地に対して郷土と感じて格別の親しみを持ち、また愛情を寄せるのは、自然の情である。異境に移り住んで郷里をなつかしむ者の心は、いっそう切実である。しかし郷土意識は、ただ生まれ育った土地という意識だけにかぎられるものではない。郷土意識には地縁的な連帯感が働いているが、この地縁的な連帯感には、生まれ育った所というだけではなく、その土地の一員として地域社会の生活に参加し、連帯性をもつという生活感が、もう一つの要因をなしている。その場合、生まれ育ったことが唯一の条件でなく、たとえ他の地から来住した者でも、そこに生活の根を下ろし、いわゆる第二の故郷として、特別の親しみと愛情とをもつかぎり、新たな郷土意識が生まれる。このような新郷土意識は、都市生活が発達し、人口の移動が著しい現代では、とくに地域社会の生活の向上と発展のため、大いに高められることが望ましい。

これに対して、従来、愛郷心・郷土愛などと呼ばれるものには、とかくすると狭く独善的な自己満足の性質がまじりやすかった。いわゆる「お国自慢」は、これ人情の自然なり、としてほほえましく思われるものであるが、その自慢過剰の害が大きいことはいうまでもない。封建制の時代では、大小の領主が各地に割拠し、その領地の区域がすなわ

ち「国」であり、日本全国はすなわち「天下」であった。武士も人民もこの小区域を自己の「国」として、そこ以外の地は異境視していたので、生活の意識もきわめて狭小であった。したがって自己の郷土については、自尊独善の心が強く、他郷の生活を理解せず、不当に軽視する傾向が強くなった。自尊他卑は鎖国制下の日本人の外国観にもみられたものである。江戸時代の大名領のうちでも、とりわけ大々名で初めから移封がなかった所、名家として格式を誇り、勢威を張っていた所などでは、とくにこのような自尊の傾向がみられた。さらに明治維新の際、勤王倒幕運動に功労のあった藩では、素朴であるべき郷土愛が明治時代でも藩閥意識の中に少なからず歪められて強調された。このような自尊過度の郷土意識が、人心開明の現代社会にふさわしくないことは、説明するまでもあるまい。

自尊過度の郷土意識は、しばしば郷土の歴史意識を自慢自尊へ向かわせ、修史事業を制約することがある。たとえば明治時代に、王政復古の際の諸藩の立場と行動につき、その地元や元大名家などで修史が行なわれたが、その中には右のような傾向をもった編纂書も少なくない。郷土史は郷土意識によって生命を与えられるが、郷土意識は時勢の進歩と共に新たな発展を遂げるべきものであり、また修史と読史によつてこそ、正しい郷土意識の育成と高揚を期待できるのである。この場合、郷土史を日本全史の中で考えること、及び他の地方の歴史と比較しながら見るのが望ましい、さらに郷土史の特定の部分、または特定の時代にだけ重点を置かず、また、いろいろの方面の史実をもらさず、真に総合的な修史を行なうべきであろう。こうしてこそ、歴史意識と郷土意識とは、たがいに正しく育成し合つて、郷土生活の発展を培（つちか）うことができるであろう。

歴史と人生

歴史は世態人情の移り変わりの跡であるから、政治の得失、人間の行為の善悪を照らし出す鑑（鏡）にたとえられ、古来、大鏡・増鏡・吾妻鏡などの歴史書がつくられた。そして修史と読史とは、人間の修養、政治の鑑戒のため、かならず修めるべき学問とされた。すなわち歴史と人生とは本来一体なるものであり、歴史学は人生学としてあらゆる学問の根底にあるものだ、と考えられたのである。事実、移りゆく世々の姿をみると、人間の行為の是非善悪、人間の性質の賢愚美醜、人間関係の曲折微妙の実態をあきらかに知ることができ、人間の欲望・怨恨・闘争が渦巻く歴史の激しさに多くの人生教訓を求めることができる。

まことに歴史は人生の鑑である。しかし他方から考えれば、人間の心こそ歴史の姿をうつす鏡ではないだろうか。歴史に向ける心の鏡が正しくなければ、鏡面にうつる歴史の姿はゆがむ。鏡面に曇りがあれば、歴史の姿ははっきりとはうつらない。鏡の大小、鏡面の傾斜次第でうつる歴史の姿も、あるいは局部だけとなり、あるいは片寄った形ともなろう。

いやしくも歴史を正しく写そうと思うならば、心を正しく澄まさねばならない。心を正しくとは、好悪の感情や党派心による偏見にとらわれず、公正な判断で歴史上の事件や人物の行為を真実に知ろうとする態度である。公正な判断と真実の理解が修史を行なう者にとって最も重要であることはいままでもないが、読史する者の公正な歴史意識もまたこれと密接な関係をもっている。とりわけ、権力の争闘や主義主張の対立抗争が史上に多く、そのうちには歴史の動因となっているものもあるが、それらの対立勢力をややもすると、善玉悪玉に差別を立てて、一方の立場を宣揚し、他方の立場を無視するような歴史観が現われやすい。また闘争に敗れて滅亡したものは、その史料も共に滅

びて、後世に伝わる事跡が少なく、時運に乗って勝利を収めたものは、その勝利の栄光を伝える史料を保存し、勝利の記録を史書に編さんすることが多い。したがって、歴史は勝者の歴史となりやすく、敗者の歴史は埋もれ朽ちはてるのが、宿命である。しかし心の鏡に歴史の姿を正しく写そうと欲するならば、敗者の古文書の断片でも、草むらのかすかな遺跡でも、もらさず探し求めて、ありし日の事跡をできる限り究明しなければならない。さらに、歴史上の対立や抗争は、その時代の環境や情勢の中に、それぞれそうあるべき因果関係で起こったものであるから、後世の感情や思想によって論評せず、どのような立場についても、その当時の歴史的関係の中で考える心掛けが、必要である。これらの心掛けは、歴史学のヒューマニズムとして拡大すべきものではなかろうか。そして修史のヒューマニズムは、とくに南北朝時代、戦国時代および幕末維新期の研究に発揮されねばならない。水戸地方の歴史についていえば、南北朝時代と幕末維新期に公正にして寛容な研究態度が望まれるわけである。

一方、郷土の歴史に輝かしい伝統を求め、郷土の先人の事蹟に尊い教訓を得ようとすることは、これまた歴史と人生と郷土との相互関係にもとづく自然の人情である。たとえば、人格修養のため郷土の学者の伝記を読む、人生行路難にうち克つため郷土の偉人の精神を仰ぐ、時局打開の思想の抛り所を求めて、郷土の幕末史を読むなどは、すべて、歴史は心の鑑・心は歴史の鏡という道理による修史・読史の効能である。そして、このように郷土の人の心を動かし奮い立たせる力を、郷土の歴史から取り出すことは、歴史学の任務の一つでもある。

元来、学問の道には三つの型がある。第一を認識型、第二を求道型、第三を実行型と名付けよう。認識型とは、知識を習得し、真実を認識しようとするものである。求道型とは、学習研究をただ認識だけにとど

めず、人生を探究し、人格修養に活用しようとするもの、実行型とは、政治経済・科学技術などのいわゆる実務の学習である。歴史学は人文科学であり、その中でも、とくに人生学としての性質が強いものであるから、認識型と共に求道型をも当然に併せ持っているし、また持つことが望ましい。しかし求道といっても、歴史学の場合は宗教・道德などの場合とは全く違う。歴史学は人生の意義や規範を学習するものではなく、過去から現在におよぶ人間社会の発展の跡を研究する学問である以上、つねに客観的な真実性をその生命とする。したがって求道心の盛んなあまり、内心の要求や信念によって史実を主観的に解釈し、または一方的に史料を取捨するような態度は、歴史学を害するものである。

それよりも、物事の真偽に対する正確な判断力、複雑な事件や人間関係についての理解力、時勢の推移に関する洞察力など、われわれが日常持たなければならない理性の力は、歴史学によっておのずから錬磨される場合が多い。また政治の制度、社会の組織の移り変わりゆく様子や、闘争と殺し合いと栄枯盛衰の跡を調べれば、歴史無常の感をふかめ、人間の業や営みには絶対的な価値はないこと、世事人事はすべて相対的で、有限性であることに気付き、おのずから謙虚な心を養うことにもなるであろう。さらに、古社寺が戦乱の世にも、法灯を絶やさず高くかかげて今日に現存している有様、古代以来平野を耕やす農業の進歩の跡、あるいは国家・民族の危機に活動した志士の精神、などを明らかにすれば、歴史無常感より転じて、歴史の連続性・永遠性を感得することができるだろう。これらはすべて人生学としての歴史学の働きである。とくに歴史学のいろいろの部門の中、郷土史はただ政治史とか経済史とかの一部門だけではなく、史料が伝存し史実が判明する限り、すべての部門を総合して、郷土生活の移り変わりを記述する

ものであり、かつ郷土の人にとって最も身近かな歴史であるから、その人生学としての意義は測り知れないほど大きい。

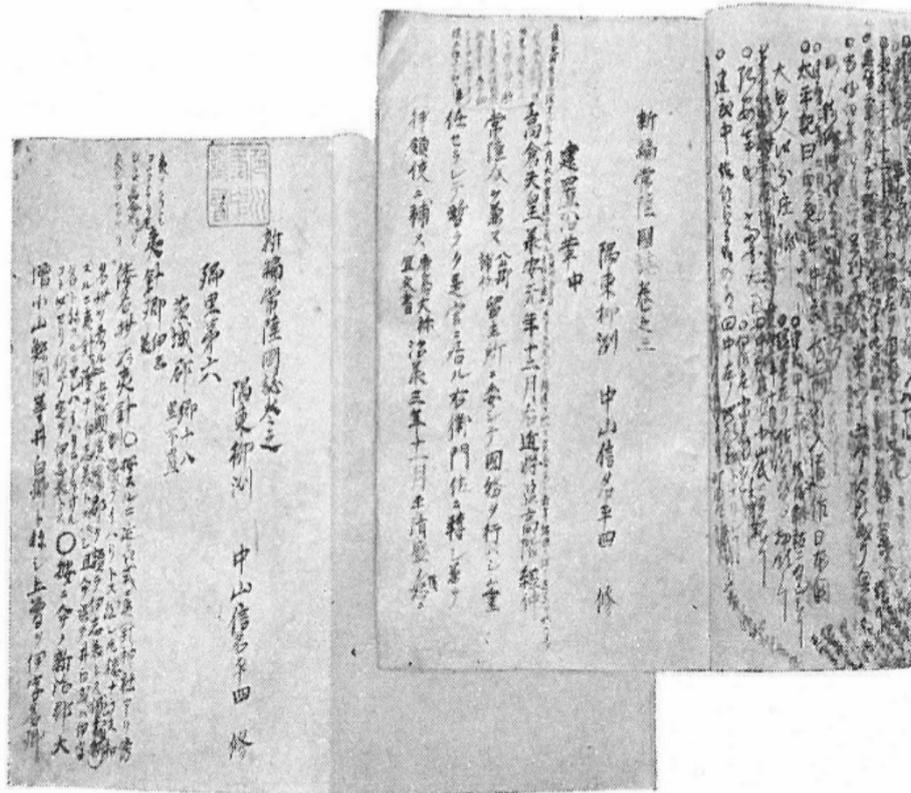
水戸の歴史は、他の地方の歴史に比べて、とりわけ江戸時代と明治維新とに光彩を放っている。もちろん、この時代の史実と人間の行動には、封建制度の特性から考えなければ理解できないものもあるが、また時代の制約を越えて人心に深い感銘を与え、長く歴史的生命をもちつづけるものもある。水戸の修史・読史に当たっては、この事に深く留意しなければならない。古人の言に「不易流行」という標語がある。また「古人の跡を求めず、古人の求めし所を求めよ」という格言がある。これらの標語や格言は修史・読史の心掛けとして、また歴史と人生との道しるべとして、実に有益ではあるまいか。

市史編さんの方針

これまで説明したところは、郷土史における修史・読史の基本精神である。この基本精神を念頭におき、市史編さんの方針を次のように定めよう。

(一) 史料の精査、史実の精究にもとづいて、従来の郷土史を検討し、新たな構想をもって体系を定めること。これは進歩の著しい現代歴史学、とりわけ、地方史研究の現状を考えれば、当然のことである。それにもかかわらず、このことを第一に挙げるわけは、水戸が江戸時代以来優れた歴史学の伝統の地であり、常陸地方の史誌につき立派な著述を生み出した所だからである。とくに水戸の郷土史編さんの成果は、大日本史編さん事業と共に高く評価すべきものである。水戸の郷土史学は光圀時代に小宅生順（おやけなりゆき）をして常陸国誌を編さんさせたことに源を発し、中山信名の新編常陸国誌に至って、あたかも大河のごとき一大郷土史誌となった。この中山信名の著述は未完

成のうちに、天保七年（一八三六）信名が病死したので、その後、色川三中（みなか）が修訂を加え、さらに明治二十四年（一八九一）、栗田寛が増補修訂して、同二十六年、原稿六〇余巻を一四三巻となし、同三十四年、上下二冊として刊行した。史料の収集、史実の判定、記事の正確、そのいずれを見ても、全国の郷土史誌の中でも屈指の出来栄である。しかるに、このような高い水準の郷土史誌を生んだ水戸でありながら、大正・昭和時代では、この後を継承するような業績は現われなかった。このため、現在でも、水戸の郷土史学の水準は、江戸時代以前の部分に関するかぎり、中山・色川・栗田など先人の学業を多くは越えていない状態である。この事実を省み、現代歴史学の進歩を眼前に見れば、従来成果を採用しながら、さらに検討を加え、新たな構想による研究を行なうことが、先人の偉績を継承する道であろう。



第2図 「新編常陸国誌」の草稿 中山信名の自筆（静嘉堂文庫所蔵）

(二) 高度の学問性と共に、豊かな郷土性を持つように、体裁・文章はもちろんのこと、構想、史実の選定、説明などに至るまで配慮すること。これまた当然のことであるが、現代歴史学の状況と郷土史編さんの傾向とを省みれば、やはりこの方針を重視しなければならない。学問性とは、できるかぎり現代歴史学の長所を発揮して高い研究的性格を打ち出すことである。そのためには、真実を曲げたり隠したりしない堅実な態度が必要である。また常に公正客観の態度を忘れず、独善的・主観的な解釈におち入らぬように、自ら戒しめることである。

しかし高度の学問性に富む歴史書が、かならずしも郷土史として立派なものとは限らない。良い学術書といわれる県史や市史でも、郷土性が薄いために、郷土史として何ほどかの短所を持っていることあるろう。このような短所は、一般史を基準とし、その問題と方法と型式とを、そのまま郷土史編さんに持ち込むところから起こりやすい。そして学者の研究上の興味と学風をそのまま郷土史に現わそうとするところに、郷土性への配慮がうすくなりやすい。そのために、ある専門の方面だけに詳しく、他の方面の史実を軽く取扱うことになったり、一般史の問題としては重要でないからといって、郷土生活にとっては興味深い事件を無視したりする。とくに現代歴史学では、社会史・経済史を偏重する傾向が強いため、その偏向性が郷土史を型にはめてしまうことが少なくない。その結果、どこの県史でも市史でも同じような型式となり、郷土性が薄れるのである。

郷土性とは郷土の特色であり、郷土の味であり香りである。歴史の歩みは地方によって相違があり、史上に起こる事件もまた千差万別である。それを一般史の型式の中に整理しすぎてはならない。盆景同様に、初めから山や川や道の位置が定まっているのではなく、進みゆき踏み分けゆくにつれて、山あり谷あり、野原また開ける風景こそ、好ま

しい郷土史である。この方針を少しでもよく実現するため、文化史や生活史を十分に重視しよう。

文化史・生活史の方面の史実は江戸時代以前では比較的少ないので、ややもすると軽視され、章節の終わりに付録同様な取扱いを受けることもあるが、水戸市史では史実の判明するかぎり、詳しく記したい。また一般史の時代区分（古代・中世・近世・近代など、あるいは奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代など）をそのまま割り当てて、郷土史を区切る方法は採らず、郷土史の上で、重要で基本的な問題を中心として章を立て、各章の初めに一般史との関連につき概説しよう。以上のことは要するに、研究方法と編さん技術の上の方針であるが、その根底には、郷土性こそ郷土史の生命であるとの史観を貫きたい。

（三） 全編の編成は上中下三巻とし、まず上巻では、有史以前の原始時代から佐竹氏の秋田移封までを取り扱うこととする。

中巻には、水戸藩の成立から明治維新後の藩制の解体までを収めることとする。

下巻では、明治・大正から昭和の現代までの歴史を記述する。さらに通史では十分に説明しつくされない文化財・人物伝のほか重要で特殊な問題は、別篇に収めて下巻に入れる。

そして各巻の末には、その時代の年表と重要な史料を収めることとする。

一般史の時代区分からいえば、上巻は古代中世篇、中巻は近世篇、下巻は近代（最近世）・現代篇にあたる。ただし一般史との間に多少の時代差がある。たとえば一般史では、中世後期にあたる室町時代の初めを、暦応元年（一三三八）足利氏の武家政治再興からと考えるが、水戸の歴史では、応永三十三年（一四二六）頃江戸氏の水戸進出、大掾氏の敗退が時代の転換期となっている。また一般に近世史は、永禄十一年

(一五六八)織田氏の京都進出、または天正元年(一五七三)室町幕府の滅亡などの時期をもって始まるとなすが、水戸史では、豊臣氏の天下統一と同じく天正十八年、佐竹氏の水戸城占拠の時を近世の開幕と見なすことができる。しかし郷土全般の形勢、次の徳川氏の時代との関係から考えると、佐竹氏の時代を徳川氏の時代の前に置いて中巻で記述するよりも、前領主江戸氏の時代につづけて上巻に入れる方が、この地方の歴史の歩みにふさわしい。

なお一般に、奈良・平安・鎌倉時代の地方史では史料史実が少ないので、市史や町村史の編さんに、その時代の記事が他の時代に比べて貧弱な場合が多い。そのため、近年盛んな考古学の取り扱う時代と近世史の部分とが詳しいのに比べて、その中間の時代の記事が少ない郷土史となりやすい。水戸市史では、このような不調和をなるべくさけるため、奈良・平安・鎌倉時代などには、つとめて考証記事をも加え入れて、内容の充実をはかることとする。

さらに、もと城下町であった都市の江戸時代史では、ややもすると領主の事蹟や政治史が大部分を占めやすい。とくに水戸のように、領主が徳川御三家で、その上、精彩に富む藩政史をくりひろげた所では、おのずからこのような傾向の市史になるのである。しかし何千年という長い歴史からみれば、水戸藩時代約二六〇年は、封建制時代の一つの時期にすぎない。しかも日本史の歩みでは、すでに明治維新と大平洋戦争を経て、封建の余風も消滅し、新たな時代の進運が国中に興りつつある現代、水戸も過去の栄光だけに頼らず、将来へ向けて創造と前進につとめなければならない立場にある。すなわち過去現在将来にわたる歴史展望台に立てば、水戸藩史は広大な郷土史の一つの分野として眺められる。そこで中巻では、このことを常に念頭に置き、水戸藩史は水戸近世史の重要部分ではあるが、その全部ではないこと、この

時代の民衆の生活と文化を大いに重視すること、などを近世史記述の根本方針とする。

なお最近世史では、郷土の政治・社会・経済・文化などで、それまでの歴史時代に形成されたものと、明治維新の後、西洋文明の摂取によって新たに建設されたものとの、どのような関係をもって現代水戸市を作り上げたか、また近代国家の巨大な機構の中で水戸はどのような位置を占めたか、ということの基本問題としよう。これは日本歴史上、重要であるばかりでなく、水戸市の未来の発展のためにも必要だからである。

上巻の諸章

上巻は十三章と付録とから成る。〔第一章〕では、人文地理学の立場から、水戸の自然と人文との関係について記述する。郷土生活を歴史的に理解するには、人文地理学の方法と知識とが重要だからである。

〔第二章〕では、考古学の立場から、主として縄文式・弥生式文化にあたる時代を記述し、〔第三章〕では、これに続いて古墳文化の時代を取り扱う。この章では、古代の豪族那珂国造の勢力が大きな問題となるであろう。事情が許す限り遺跡の調査も行なった。

〔第四章〕では、主として奈良時代の水戸地方を説明する。ここでは、那賀（珂）郡・郡家・郡領・河内駅家、渡里の廃寺址、田谷の廃寺址など、古代の水戸地方の生活と文化を示す問題が少なくない。そこで、ただ文献史料だけでなく、史蹟の実測踏査にも努力した。郷土史研究には歴史考古学が重要だからである。また歴史地理学の知識も必要だから、古代地理にも注意するつもりである。

〔第五章〕は平安時代である。律令制度の改廃が郷土生活に及ぼした影響と共に、文化中心地の移動の問題がある。すなわち、この時代以

前まで渡里の台地を中心とした古代文化が吉田の台地に移ったのではなかろうか、という問題である。ここに吉田神社と薬王院とが史上に姿を現わす。さらに平将門の乱、および常陸大掾氏以下の初期武士団の興起は、やがて郷土の歴史に大きな変化をもたらして、古代史の幕が下り、次の中世史に入るのである。

〔第六章〕は鎌倉時代、ここでは武家政治の開始、初期封建制度の成立と馬場大掾氏ら常陸武士団、吉田神社の崇敬と吉田庄の実態、仏教文化と郷土生活などが重要問題である。とりわけ、吉田神社と吉田庄とは、吉田神社文書（九七点）・吉田薬王院文書（一四二点）があるので、精密な研究を行なうことができる。この両文書のふくむ時代は、平安末期から江戸時代初め頃におよぶが、その大部分は鎌倉時代である。惜しいことに原本がすでに失われたが、江戸時代の良質の伝写本があり、量質ともに水戸地方では最上の根本史料である。（先にこれを校訂して孔版印刷に付した。）

〔第七章〕は南北朝時代で、常陸は南朝方・北朝方両軍の戦いが激しかった地方であるから、水戸地方に重点をおきながら、全般の形勢を説明する。戦乱がつづくうちに、諸国では新旧勢力の興亡が著しく、庄園制度の崩壊が進行したが、水戸地方では大掾氏・江戸氏・佐竹氏の勢力の消長が興味深い問題である。吉田庄については、便宜により、前章でまとめて説明する。

〔第八章〕室町時代にあたる時代で、水戸は新興大名江戸氏が居城したので、この地方の重鎮たる地位を占めた。したがって、記述は水戸領主江戸氏歴代の事蹟・領国・家臣団、および佐竹氏・大掾氏らとの勢力関係などが主要な部分を占める。しかし江戸氏は滅亡したので、その関係史料の確実なものは甚だ少ない。そこで寺院の過去帳などまで活用して、埋もれた事蹟の解明に努力しよう。

〔第九章〕は、水戸地域の城址・館址を調査し、とりわけ堀・土塁などが比較的よく残っている所について、実測作図し、詳しい説明を加えることとした。城址・館址は領主の政治上・軍事上の性格を具体的に物語るものであるから、その実測研究の意義は大きい。歴史考古学の一部門として、今後どの地方史でも期待されるべき研究である。

〔第十章〕一般に室町時代は地方文化の発達が見られた時代であるが、これを推進したものは地方の領主階層と郷村社会である。江戸氏治下の水戸地方では、どのような景況がみられるだろうか。その記述が第十章であるが、ここでも仏教が大きな部分を占める。

〔第十一章〕では、佐竹氏治下の水戸の歴史を取り扱う。この時代は豊臣氏の全国統一、封建制度の発展、桃山文化の開花などによって、中世史が終わり、近世史が始まる時代である。それだけに、佐竹氏時代はわずか十三年間ながら、領国の統一、農村の支配、家臣団の統制、城と城下町の建設、経済の発展など多方面に、郷土生活の進歩が著しかった。それらの重要問題の研究には、比較的多くの史料を集めることができた。そのうち、最も主要な古文書記録類は、水戸よりも秋田の方に多く伝存し、また東京大学史料編纂所にも写し伝えられている。これら根本史料を詳しく調べて、佐竹氏時代の水戸の歴史を記述すれば、一般歴史学界に大いに寄与することにもなるであろう。

〔第十二章〕では、佐竹氏時代の歴史のうち、とくに文化の新たな気運と郷土の生活の実態を記述する。そのうち、桃山文化の流入、海外文化との接触など興味深い問題があるので、開放的、進取的なこの時代の精神を知ることができよう。

〔第十三章〕は佐竹氏の秋田移封である。この事件により郷土の歴史が転換して、次の徳川氏時代に入るが、移封の原因となった関ヶ原役の際の佐竹氏の行動、および国替え当時の情勢は、波瀾重畳の趣を

示し、まことに歴史の興味が深い。ここに多くの文書を駆使して、その始末を活写し、もって上巻の結びとする。

〔付録〕には、重要文書を精選して、本文を理解するための拠り所とする。さらに年表を作成して、本文通読の参考に供する。